

広島経済大学経済学会

2017年度 第7回研究集会〔2018年3月9日(木)〕報告要旨

ジョウゼフ・コンラッドとアフリカ*

——『闇の奥』の世界——

藤 山 和 久**

1. はじめに

19世紀後半から20世紀初頭、西欧列強による植民地支配が絶頂にあり、アジア・アフリカはヨーロッパ諸国の支配下にあった。そのような時代にポーランドに生まれた Joseph Conrad (1857~1924) は、幼い時分に両親を亡くし、叔父のもとで育てられた。その後、イギリス国籍を取得した1886年も含め、彼は約20年間の船員生活を送った。その船員としての体験は、小説家 Conrad の形成に深く寄与した。概して、Conrad は海洋小説を中心に執筆した作家として知られており、その著作のほとんどがアジア・アフリカなど当時の植民地を舞台としている。彼にとってそこは異世界であり、Robert Hampson が指摘するように、異文化表象は Conrad が幾度も直面した大きな問題であった(1)。とりわけ、コンゴ河遡行の体験に基づいた *Heart of Darkness* (1899) には、Conrad 自身の異文化への眼差しが投影されている。本作品は、アフリカ奥地で消息を絶った Kurtz の救出劇を中心とした、語り手 Marlow の体験談の体裁をとった小説であり、同時に、白人による植民地支配を克明に描いた小説でもある。本稿は、この *Heart of Darkness* を中心に読み解き、

Conrad のアフリカへの眼差しを再考したものである。

2. アフリカの「闇」

Conrad にとって異文化であるアフリカは、「闇」や「暗黒」(darkness)として形容される。さらに *Heart of Darkness* においては、アフリカ黒人たちも同様に、語り手 Marlow によって「闇」として表される。黒人を目の当たりにした語り手は、アフリカ大陸がそうであるように、原始性を多分に孕んだ野蛮や未開の象徴として彼らを見つめ、その一方で、彼らが類縁性を持った人類であることを認めようとする(139)。このような Marlow の姿は、彼が属する西欧(白人)と、彼にとって異質な理解しがたい他者であるはずの非西欧(黒人)との間に繋がりを見出した衝撃的な心情を吐露するものである。それは同時に、アフリカに非ヨーロッパ・イメージを押し付けるオリエンタリズム的な思考様式を示すものに他ならない¹⁾。

Conrad は自伝 *A Personal Record* (1912) において、幼少時代にアフリカ大陸の地図を眺め、空白地帯に指を置きながら、“When I grow up I shall go *there* [to Africa]” (13) と自信満々に自分自身に言い聞かせていたことを回想する。このアフリカ渡航の夢は、その後1890年のコンゴ河遡行の体験によって実現することとなる。これは、*Heart of Darkness* においても、語り手 Marlow によって言及される。少年時代の

* 本報告要旨は、拙稿「『闇の奥』からみた文明—Joseph Conrad のアフリカ世界—」(『比較文化研究』No. 106)の一部を加筆修正したものである。

** 広島経済大学経済学部助教

Marlow にとって、アフリカをはじめとする地図の空白地帯は、彼の冒険心を喚起し、見果てぬ大地を夢想させるものであった²⁾。しかし、その夢の実現とともに、眼前に広がる「闇」(=アフリカ)を前にした Marlow は悲嘆に暮れる (108)。

ここで最も重要な点は、地図上の「空白地帯」(a blank space) が、「暗黒地帯」(a place of darkness) として Marlow の眼前に広がることである。ヨーロッパ人たちが「文明の光」を以って支配した「空白地帯」、つまりヨーロッパ的な価値体系が蠢いていた場所を、Marlow は「闇」だと認識するのである。

3. 文明の「闇」

Heart of Darkness において、アフリカ奥地出張所代理人 Kurtz は、Marlow に重大な影響を与える。詩作や絵画、音楽と多岐にわたる芸術的な才能により“a universal genius” (181) と称される Kurtz は、原始世界を啓蒙しようとする高い理想や信念を抱いていた。文明世界から遠く離れたアフリカ奥地に住まうにつれて、彼は理想や信念を失ってしまう³⁾。

Marlow によれば、魅惑的な囁き声を Kurtz に向けるアフリカの自然は、「恐ろしい復讐」を目論んでいた (164)。Kurtz は、「忘れられた野獣の本能」と「恐ろしい情欲」を呼びさます「荒野の魔力」にとり憑かれてしまう。ここでの「魔力」とは、文明社会において抑圧されてきた人間の欲望や本能を浮き彫りにするアフリカの自然が持ち得る力に他ならない。その結果、Kurtz は理想や信念を失い、象牙に対する異常なまでの物欲に駆りたてられ、さらに彼に逆らう原住民の首を切って竿に刺して並べるような蛮行を犯す⁴⁾。

アフリカの自然の魔力は、ヨーロッパ人が理性によって抑圧している部分を暴き出し、ヨーロッパ的価値観を解体させる。「黒人=野蛮」

だと捉えていた Marlow は、いわゆる原始的な状況下に置かれた人間の実態を通して、「文明」の権化とも言うべき Kurtz の心奥にも「闇」が潜んでいることを発見するのである。

ところが、Marlow は、アフリカにおいて理想を失い欲望のままにふるまう Kurtz に対して“much better”あるいは“a remarkable man”だとみなして賞賛的な態度を示す一方、文明社会に生きる人間たちに対して非難の矛先を向けもする。アフリカからブリュッセルと思しき「墓場のような都市に生還した」Marlow は、そこに住む人々を見てひどい嫌悪感を抱く (179)。アフリカ奥地で豹変した Kurtz、つまり文明の仮面を脱ぎさり欲望のままに振る舞う人間を、彼らは知らないからだ。「文明」と「原始」との違いを認識したと豪語する Marlow は、都会の住人たちを、その違いを知ることなく生きる者たちだとみなし、憤りと軽蔑的な眼差しを彼らに向ける。

その上 Marlow は、彼を雇った貿易会社の所在地であるブリュッセルと思しき都市を、常に「白く塗られた墓」を連想させると語る (110)。聖書によれば、この「白く塗られた墓」は「偽善者」を意味する表現として用いられる。つまり、Marlow は都会に住む文明人たちのことを偽善者とみなしているのである。言うまでもなく、この偽善者とは、進歩や開発の美名のもとに象牙の収奪と黒人の搾取を行ったとされる植民者も含まれる。Marlow はそこに文明の「闇」を見出しているのであって、ゆえに、文明の仮面を剥ぎ取って自らの欲望をとめどなく露にする Kurtz を“much better”と形容するのである。

4. おわりに

作者 Conrad はアフリカでの体験を経た後、友人に“Before the Congo I was just a mere animal” (Sherry 63) と語ったと言われている。ここからも、アフリカでの体験が、いかに大き

な影響を彼に及ぼしたかがうかがえる。さらに帰国後、マラリアや赤痢に罹患するばかりではなく、精神的な面においても鬱病やノイローゼに苦しめられる (Baines 119)。このような側面から見ても、Conrad 自身も、アフリカの環境下においては無力な存在でしかなかった。彼がアフリカから持ちかえったものは、失望や幻滅だったことだろう。

Heart of Darkness において、イギリス人の Marlow にとって夢や幻想の対象であったアフリカは、コンゴ河遡行の体験を通して、「闇」「暗黒」の地帯として表象される。Marlow はそれから、アフリカ奥地で消息を絶った Kurtz を通して、人間性の「闇」、さらには文明が隠し持っている「闇」を認識するに至る。これはつまり、植民地主義や西欧中心主義に対する Conrad の批判的な態度を表していると換言することができるだろう。

注

- 1) 黒人が野蛮であることを前提とした描写に対して、異議を唱える批評家も少なくない。例えば Chinua Achebe は、Conrad が人種差別主義者であり、黒人に嫌悪感を抱いていると指摘している (257)。
- 2) Andrea White や Linda Dryden が指摘するように、当時のアフリカをはじめとする非西欧世界は、Marlow が抱く夢や理想に顕著に見られる “adventure tradition” あるいは “imperial romance” の恰好の舞台であった。
- 3) Kurtz におけるこの変化は、国際蛮習防止協会に依頼されて書いた報告書の後書きの言葉 “Exterminate all the brutes!” (155) 及び彼の今際の叫び “The horror! The horror!” (178) からうかがえる。杉浦廣治氏は、これらの言葉が「Kurtz の未開人に対するたてまえとしての思想と現実の行動との乖離と、それについての目覚め」を意味すると指摘している (89)。
- 4) Ania Loomba が指摘するように、本小説におけるアフリカは「ヨーロッパ人の価値体系が解体し、

原始的な状態に退歩する場所」(136) としての機能を有していると言える。

参考文献

- Achebe, Chinua. “An Image of Africa: Racism in Conrad’s *Heart of Darkness*.” *Joseph Conrad: Heart of Darkness*. Ed. Robert Kimbrough. New York: W. W. Norton & Company, 1988, 251–262.
- Baines, Jocelyn. *Joseph Conrad: A Critical Biography*. 1960. London: Weidenfeld & Nicolson, 1993.
- Conrad, Joseph. *Heart of Darkness and Other Tales*. Oxford: Oxford UP, 2008.
- . *The Mirror of the Sea: Memories and Impressions*. London: J. M. Dent & Sons, 1960.
- . *A Personal Record: Some Reminiscences*. London: J. M. Dent & Sons, 1960.
- Dryden, Linda. *Joseph Conrad and the Imperial Romance*. London: Macmillan, 2000.
- Guerard, Albert J. *Conrad the Novelist*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1958.
- Hampson, Robert. *Cross-Cultural Encounters in Joseph Conrad’s Malay Fiction*. Basingstoke: Palgrave, 2000.
- Loomba, Ania. *Colonialism / Postcolonialism*. London: Routledge, 1998.
- Said, Edward W. *Culture and Imperialism*. New York: Vintage Books, 1993.
- Sherry, Norman. *Conrad and His World*. London: Thames and Hudson, 1972.
- Watt, Ian. *Conrad in the Nineteenth Century*. Berkeley: U of California P, 1981.
- White, Andrea. *Joseph Conrad and the Adventure Tradition: Constructing and Deconstructing the Imperial Subject*. Cambridge: Cambridge UP, 1993.
- 杉浦廣治『コンラッド『闇の奥』の研究—帝国主義と文明と—』成美堂, 2003年。
- 中野好夫編『20世紀英米文学案内3 コンラッド』研究社, 1996年。
- 藤山和久「『闇の奥』からみた文明—Joseph Conrad のアフリカ世界—」『比較文化研究』No. 106, 日本比較文化学会, 2013年, 275–284。
- 正木恒夫『植民地幻想—イギリス文学と非ヨーロッパ—』みすず書房, 1995年。
- 本橋哲也『ポストコロニアリズム』岩波書店, 2005年。
- 吉田徹夫『ジョウゼフ・コンラッドの世界—翼の折れた鳥』(第2版) 開文社出版, 2005年。